（紹　介）

首藤基澄句集『己身（こしん）』

平成五年十一月二十五日、一冊の句集が角川書店から刊行された。首藤基澄氏の句集『己身』がそれである。著者は大分県の出身。現在は熊本大学の教授であるが、かつて、別府大学で教鞭を執っていたこともある。既に『高村光太郎』、『金子光晴研究』、『福永武彦の世界』、『藤村の詩』などの著書を持つ、著名な近代文学研究家である。

逸（はや）り雄（を）の己身の弥陀や冬の濤
恋猫のこゑや己心の小憎らし

「後記」によると、著者は、十年前漱石の〈俳論にいたく共鳴し、作句の意欲が湧いて来〉た。そして、〈急に俳句を作ってみたくなった〉という。漱石は俳句を「レトリックの煎じ詰めたもの」と言っている。著者はその「レトリック」を「生」に置き換えて共鳴したのであった。そこで、自分の全人格をかけて俳句を作ってみようと、昭和六十一年、人間探求派の中村草田男を師系とする「未来図」に入会、鍵和田釉子主宰の指導を受けることになった。

〈私の場合、「孤心」が、平凡な学究の日常感覚を適切に表現する言葉であった。孤心に耐えながら、未熟な論文を書いてきた。しかし、今表現者として孤心といっては、甘い雰囲気がまといつく。「せきをしてもひとり」という甘えを、今の私は忌避する。作句を始めてから、私は次第に「己心」に目を向け、「己身」そのものに強い関心を持つようになった。「己身」（心）がいっさいの私の始まりである。自然への対峙も没入も、すべて「己身」（心）の働きに他ならない。〉

右は著者が「後記」に書きつけている言葉である。宴と孤心とは確か大岡信の言葉であった。孤心こそが歌の源ではなかったか。しかし、句集『己身』の著者の言葉は、さらに厳しい。この態度は、伊藤整のいう実践的求道者としての文学者の態度である。これは俳句を〈「生」を煎じ詰めたもの〉と受け止めた著者の、当然取るべき態度だったのであろう。先に掲げた二句は、その〈己身（心）〉を凝視した二句であった。

著者と同じく近代文学の研究者であり、俳句作者でもある今村潤子氏の「跋」によると、著者は平成三年五月に「未来図賞」を受賞している。そしてここに、記念すべき道標となる処女句集の上梓をみたのである。

句集『己身』は以下のような構成になっている。

序　錐　知命　風の貌　不知火　野火　吊橋　火砕流
己身　草の花　跋

その中から任意の句を拾ってみよう。

晩学の仰角高し花樗(あふち)
狷介の生ほつほつと姫女苑
鰯雲きりきりと錐揉みたき日
白濁を絶つ紺青の沖しぐれ
不知火のほむらや遠く焦がるる夜
道遠く光雲像の髯の冷え
寒雷の轟き一つ知命の夜
切れ長の目の冴ゆる夜風の貌
山険し蜥蜴も尻尾切りて行く
薪能風は妄執の闇に即き
阿蘇火炎無月に月のさやぎかな
尺取虫身を切り枝をつかむ足
髪切虫ぽちりぽちりといのちかむ
遊行する昼の白鷺学遠く
炎昼を瞋恚(しんい)の馬の駆け抜ける
学問を離れ夏雲追うてみる
不知火や幾代焦がるる心の火
己が身はどのひとひらか花吹雪
群れ鶴の声や妬心の尖りくる
落とすものみな削ぎ落とし白骨樹
鷹渡る天草灘に声を刺し
遠方のパトス冬夜にしみる音
冬蝶の命鎮もるガラシア廟

本書に序を寄せた師の鍵和田氏は、その序の中で首藤氏は〈「全人格をかけた言葉の芸術としての俳句」を志しておられる。これは私の師であった中村草田男が、常に全人的な作句を説いたのと全く軌を一にしている。首藤氏は更に、「全人格をかけて言葉を紡ぎ、本質に肉迫する」という書き方もされているが、ともかく風流な言葉遊びとは確と一線を劃した作句姿勢である〉と言い、〈首藤氏のこういう志向に共鳴する読者は、本書から多くの宝石を発見されるであろう。まだ少々あらけずりの宝石もあるが、将来は磨かれて、玲瓏たる玉になるにちがいない。既にその句風には、人間存在の不可思議さを感じさせるような魅力も生まれている〉と、その句の特色を紹介し、それとない賛辞を送っている。

研究生活に明け暮れていると、自己表白の強い欲求に駆られることがある。その体験が私をこの句集に共感させたのであろう。ここに紹介の筆をとったゆえんである。

（工藤　茂）